

県内の緊急宿泊施設、連日満室



住まいがない人を一時保護する施設で入居者と今後について話し合う中山八十司理事長(右)。支援を求める人は絶えない
— 笛吹市内

路上生活者の社会復帰を促しているNPO法人「やまなしライフサポート」(中山八十司理事長)が、笛吹市内に緊急一時宿泊施設(3室)を開設して約4カ月。支援を求める人は後を絶たず、連日ほぼ満室状態が続いている。山梨県の調査で今年に入って県内で確認されたホームレスは16人と、統計上5年前から半減したものの、ネットカフェ難民や車上生活者など調査対象になっていない潜在的なホームレスも多い。同NPO法人は「ホームレスにさせない水際対策や、社会復帰支援の体制づくりが必要」と指摘する。

〈桑原久美子〉

ホームレス社会で支援を

統計上は減 生活の場変え潜在化

同NPO法人は5月、笛吹市内のアパート3室を一時宿泊施設として開設した。路上生活者や住まいがない人に対し、2週間をめぐりに生活場所と食事を提供。その間、生活保護の申請や、紛失した免許

「脱出は大変」

「これで、一からやり直せる。早く働いて自立したい」。7月末、NPO法人「やまなしライフサポート」が笛吹市内に開設した一時宿泊施設の1室で、男性(56)は、再発行された免許証を手に口元を引き締めた。

男性は路上生活していた5月、スーパーでおにぎりやパンを万引して逮捕され、2カ月服役した。出所する際、弁護士に紹介されたのが同NPO法人だった。「保護を受けなかったら、公園のベンチか橋の下の生活に戻っていたかもしれない」。当面は生活保護を受けながら、再就職を目指すつもりだ。

別の所に移動

証の再発行手続き、就労支援など社会復帰も手助けする。一時宿泊施設は8月23日までの約4カ月間で延べ14人が、計138日間利用。派遣切りに遭い社員寮を追われた人など、さまざまな理由で路上生活に陥った人や住まいを失った人を保護している。同NPO法人の中山理事長は「一度、住所を失うと路上生活から抜け出すのは大変。水際で防ぐ対策や、自立するための手助けが必要だ」と話す。

県福祉保健総務課によると、県の調査ではホームレスの概数は2000年の66人をピークに減少。08年は41人だったが13年は16人に半減。特に甲府市は、08年の31人から13年は7人に激減した。JR甲府駅北口の再開発で廃ビル

や歩道橋が撤去され、別の場所に移動した可能性があるという。

同NPO法人の支援で社会復帰した人も増えている。09年から路上生活者の見回りや炊き出し、生活相談に取り組み、就労や年金受給に結び付くよう支援。12年度は、生活困窮者や路上生活に定着する前のホームレスを含め72人を社会復帰させた。

県の調査は、公園や橋の下、駅周辺などを巡回して見つかった路上生活者が中心。同NPO法人によると、近年は、温泉施設や公園の駐車場で車上生活している若いホームレスや、ネットカフェ難民も少なくない。中山理事長は「統計に表れない潜在的なホームレスはもっと多いのではない。社会全体で見守る仕組みが必要だ」と指摘する。